

飛鳥藤原第 182 次 藤原宮大極殿院の調査

飛鳥藤原第 182 次調査記者発表資料

2014 年 11 月 6 日 (木)

奈良文化財研究所 都城発掘調査部

***現地説明会を 11 月 8 日 (土) 13 時 30 分よりおこないます (小雨決行)。**

所在地： 奈良県橿原市高殿町

調査面積： 1,450 m²

調査期間： 2014 年 4 月 1 日～継続中

【調査概要】 飛鳥藤原第 182 次調査は、藤原宮大極殿院における本格的な発掘調査で、大極殿院南門の北側が対象地である。調査の結果、大極殿院の礎敷広場 (藤原宮期) のほか、造営期の先行条坊道路側溝 2 条、南北溝、運河を検出した。さらに奈良時代から平安時代の掘立柱建物 3 棟や埋納遺構などを確認し、官廃絶後の土地利用が明らかになった。このほか、造営期に破壊されたとみられる古墳の発見もあり、官造営の一過程を知る重要な手がかりを得ることができた。

1. はじめに

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、回廊で囲まれた東西約 120m、南北約 170m の区画である。大極殿院の中央には、儀式の際に天皇が御出する大極殿があり、その南側には礎敷広場を隔てて大極殿院南門が位置していた。

大極殿院では、戦前に日本古文化研究所が、大極殿と大極殿院回廊において小規模な発掘調査をおこなっており、回廊や「西殿」・「東殿」、さらに大極殿の礎石位置と建物規模を推定している。奈良文化財研究所都城発掘調査部では、これまでに藤原宮中枢部の様相解明を目的として、大極殿北方 (第 20 次)、西門 (第 21 次)、東門および東面回廊 (第 117 次)、南門 (第 148 次)、南面回廊 (第 160 次) の調査を継続的におこない、主要な建物の配置と構造を明らかにしている。本年からは朝堂院の北側にある大極殿院内庭の発掘調査に着手した。飛鳥藤原第 182 次調査は、大極殿院内庭における本格的な発掘調査である。大極殿の前においてその全容解明をめざす発掘調査は今回が初めてである。調査は 2014 年 4 月 1 日に開始し、現在も継続中である。なお、今回の調査区は南北畦より東側を東区、西側を西区とする。

2. 調査成果

1) 藤原宮期の遺構

大極殿院内庭 東区と西区の東半分で大極殿院内庭の礎敷を検出した。暗褐色土の上に黄褐色砂質土を積み、その上に礎を敷いている。礎は拳大で、礎敷の厚さは 3～5 cm。朝堂院朝庭の礎敷とはきわめて類似している。調査区内における礎敷の標高は、東区の南端ではおよそ 71.4 m で、大極殿院の南面回廊を挟んだ朝堂院朝庭北端付近の礎敷 (標高 71.5 m 前後) とほぼ同じである。いっぽう、東区中央から北端の礎敷は標高約 71.1～

71.2mで、東区南端とは最大で約0.3mの高低差があり、南面回廊に向けて高くなる。西区の礎数も南側が高く北側が低い。運河と重なる部分はやや陥没しており、埋め立て後に沈下が起きたことを示している。宮中軸線に近い西区の中央から西端にかけては礎数が削平されているが、礎数はより高かったと推定される。

2) 藤原宮造営期の遺構

運河 西区の中央部に南北に貫く大溝で、南北溝2の東側でその西肩を平面検出した。幅約7m、深さは0.7m以上である。埋土上部は砂質土と褐色土との互層をなし、人為的に埋め立てている。なお、この運河は朝堂院地区の調査（第148・153・163・169次）で逐次確認してきたほか、大極殿の北方でもすでに見つかっており（第18・20次）、今回の調査では大極殿院の南半部で運河を確認したことになる。

南北溝1 東区の南端と北端で確認した南北方向の素掘り溝。幅2.7m、深さ1.4mで、南側の第160次調査区から続き、さらに北へ24m延びることが判明した。大極殿院南門の造営に際し、南門を避けて東へと迂回させた溝とみられる。

南北溝2 西区の中央部で検出した南北方向の素掘り溝。最大幅は2.0m、深さ0.7m以上で、北へと延びる。埋土は上位から褐色土、灰色砂、暗灰色粘土で、暗灰色粘土は少量の土器と自然木を含む。既往の調査成果を考慮すると、先行朱雀大路の東側溝にあたとみられる。

南北溝3 南北溝2の西1.0～1.5mで検出した南北方向の素掘り溝で、幅約2.5mで北へ延びる。溝の深さは遺構検出面から0.7m以上で、埋土は上位から褐色土、灰色砂質土である。南北溝3は古墳の周溝を寸断しており、宮造営期以前に存在していた墳丘を削平したのちに開削されたものであろう。

東西溝1 東区の南端で検出した東西方向の素掘り溝で、幅2.0m、深さ0.7m以上である。上層の褐色土は埋立土で、下層は木屑を含む暗灰色粘土である。先行四条大路北側溝にあたる可能性がある。

3) 宮廃絶後の遺構

建物1 西区西南部で東西に並ぶ柱穴を3基検出した。柱間は2.1m（7.0尺）で、うち2基には柱根が残る。第148次調査で検出した奈良時代の掘立柱建物の北側柱列にあたり、桁行6間・梁行2間の東西棟建物であることが確定した。

建物2 西区西北部で検出した掘立柱建物。東西2間以上、南北2間以上で、調査区外に延びる。柱間は2.1m（7.0尺）である。柱穴は4基を検出し、うち1基には柱根が残る。

建物3 西区中央の北寄りで検出した掘立柱建物。東西2間で西側に庇がとり付き、南北は3間以上で北側へ延びる。柱間は2.1m（7.0尺）である。柱穴埋土からは黒色土器片が出土しており、平安時代に降る建物である。

柱列 西区の東部で検出した南北方向の柱列で、2間分・3基を確認し、さらに北へ延びる。柱間は2.1m（7.0尺）。南端の1基には柱根が残る。

埋納遺構1 西区中央のやや北寄りで検出した土坑で、長径0.5m、検出面からの深さ0.1m。奈良時代の土器を含む整地層（黄褐色砂質土）上面で検出した。奈良時代の有蓋の須恵器杯（口径20cm）を正位で埋納している。須恵器杯の中には和同開珎5枚を納めていた。

埋納遺構2 西区の中央部で検出した浅い土坑で、長径は約0.4m。平安時代の土師器小皿を重ねて納め、倒立させた土師器土釜で覆っている。

土坑1 西区の中央部で検出した土坑で、長径2.7m、短径2.1mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.2mで、黄褐色砂質土で埋め戻している。

土坑2 西区の南端近くで検出した土坑で、直径 2.8mの円形を呈する。深さは 0.5mで、黄褐色砂質土で埋め戻している。埋土からは奈良時代の土器が少量出土した。

石列 西区の東部で検出した、東に落ちる段差の法面に石を並べている。高さは 0.5mで、北へと延びる。敷地を画する地境とみられる。

4) 古墳時代の遺構

古墳周溝 西区の西寄りで検出した弧状の溝で、幅約 1.5～2.0m、検出面からの深さ約 0.3mである。溝の埋土は黒色の砂質土で、埴輪・土師器・須恵器を包含する。墳丘は完全に削平されているが、溝の形状や出土遺物から、直径約 12～15mの円墳とみられ、その西半分を検出したことになる。東半分は南北溝3や南北溝2（先行朱雀大路東側溝）、運河によって壊されている。

3. 出土遺物

第 182 次調査では、大極殿院の所用瓦などが多量に出土したほか、おもに西区において奈良時代中頃の土器が出土している。また、埋納遺構1からは奈良時代の須恵器杯とともに和同開珎が、埋納遺構2では平安時代の土師器小皿 29 枚と土師器土釜が出土している。このほか、古墳周溝からは埴輪・須恵器・土師器が出土し、近接する南北溝2・南北溝3からは耳環のほか、管玉、小玉、紡錘車など、古墳の副葬品であったことを思わせる遺物が出土している。

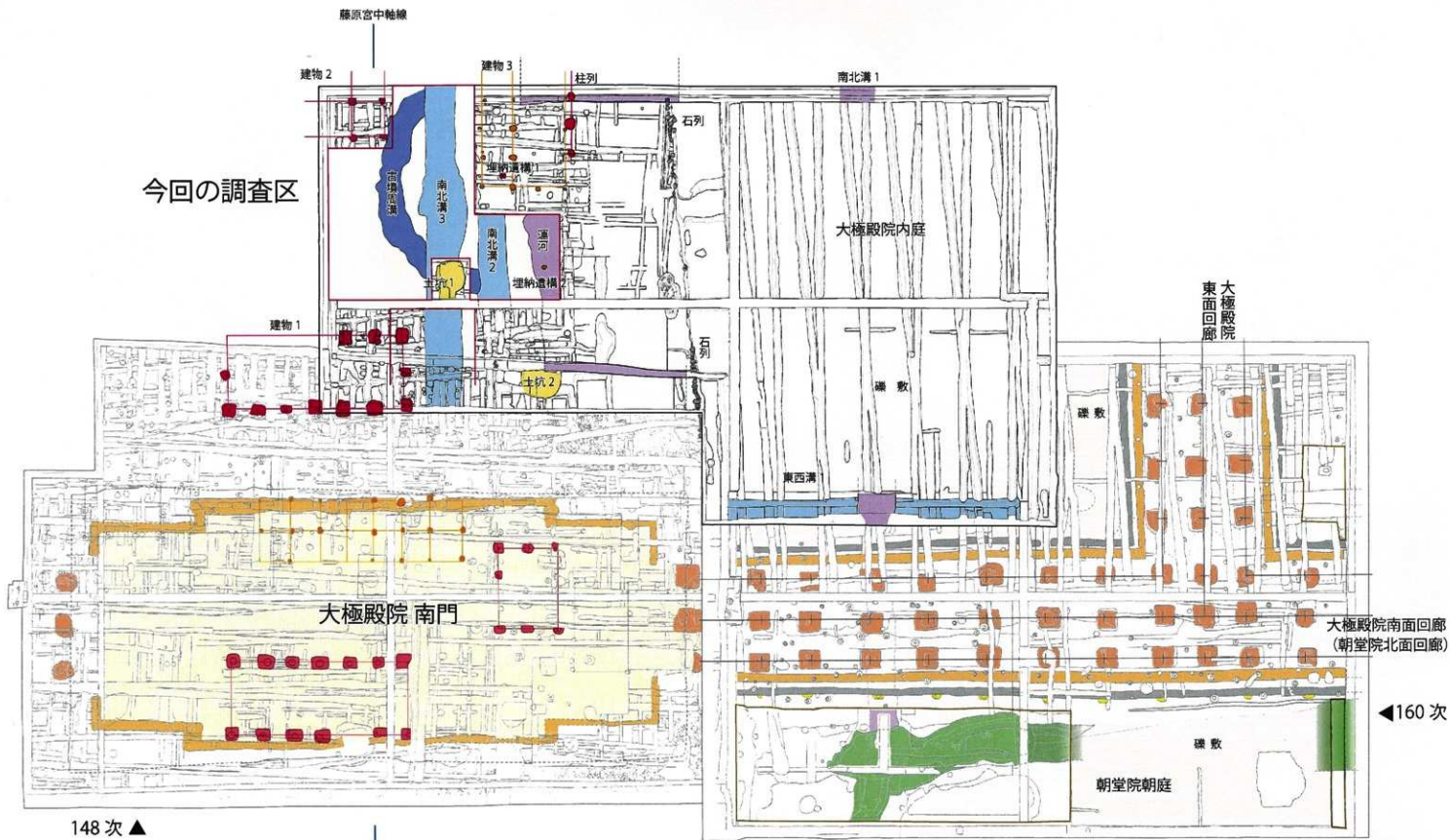
4. まとめ

調査の成果は、次のようにまとめられる。

宮期・宮造営期の遺構を確認 今回の発掘調査では、大極殿院内庭の東南部において藤原宮期の礎敷を広く確認したほか、造営期の遺構として東西溝1条、南北溝3条、運河を検出した。内庭の礎敷は南面回廊に近いほど高く、調査区北端とはおよそ 30cm の高低差がある。南北溝1は大極殿院南門の造営に際し、南門を避けて東へと迂回させた溝とみられ、今回の調査でさらに北へと延びることが判明した。東西溝1は先行四条大路北側溝にあたる可能性があり、南北溝2は先行朱雀大路東側溝に相当する。

宮廃絶後の遺構群 奈良時代には大極殿院南門の跡地付近で、掘立柱東西棟建物が 60 尺を隔て、南北に 2 棟並ぶことが判明していたが、今回の発掘調査では、建物1の規模が確定した。さらにこれらの建物と同時期の可能性のある埋納遺構1基と、南北方向の柱列とを新たに確認した。掘立柱東西棟建物と南北方向の柱列は、北でやや西に振れる点で似ており、同時存在した可能性がある。埋納遺構1は奈良時代中頃のもので、敷地の地鎮にかかわるものとみられる。また、平安時代の掘立柱建物と埋納遺構もあり、奈良時代から平安時代にかけての土地利用の状況がうかがえる。

宮域内における古墳の発見 藤原宮の造営時に破壊された古墳の周溝を発見した。藤原宮の周辺では、朱雀大路や周辺の造成にともない改葬したとみられる日高山横穴や、日高山1号墳などがある。藤原宮でも朝堂院地区は埴輪の出土量が多く、東第四堂の調査（第 144 次）では古墳周溝も見つかっている。今回の調査で発見した古墳と合わせ、宮造営以前の景観を考えるうえで重要な手がかりとなろう。



182 次遺構平面図

